京都外科集談会第370回例会

昭和35年11月28日

(1) Hürthle 細胞腺癌の1例

高知市立市民病院外科

尾辻貞夫・島田喜一郎

吾々は最近、左側頸部腫瘤を主訴とせる61才の女子の腫瘤を摘出し、組織学的検査の結果、稀にみる Hürthle 細胞腺癌と診断された症例を経験したので若干の文献的考察を加えて報告した。尚、本症例は本邦第16例目と思われる。

(2) 肺血管腫の1例

外科Ⅱ 恒川謙吾・松本達郎

58才の女子、昭和35年7月胸部の集団レントゲン検査に於て偶然右肺上野の円形(直径6cm)弧立性陰影を発見された。自覚症状は全くない。

手術時、腫瘤は右上葉内に認められ、よつて右上葉切除術を施行した。腫瘍の大きさは5×5×5cm、球形、比較的軟く、線維性被膜によつて包まれ、周囲肺組織から明らかに区別された。剖面は灰白色の索状物で区域されたスポンジ様構造を呈し暗赤色の血液凝塊で満されていた。組織学的には腫瘍の主体をなす海綿様血管腫の像と之に加えるに毛細血管腫、血管内皮腫の像が混在した。組織学的診断は良性血管腫である。

肺の血管腫は極めて稀であり、本邦に於いては本例を含めて5例のみである。よつて全例を一括して考按した。更に肺動静脈瘻と比較検討を試み、肺血管腫と肺動静脈瘻とは別箇に取扱はれるべきである事を強調した。

追加 木村忠司

動静脈瘻部は特殊の腫瘍即ち Hämangioma, Neuroma, Glomustumor 等が見られその際に当然 A. V. Shunt 像が現われる。

同様に考えると肺の動静脈瘻部にも特殊の形で血管腫を生ずる筈でこれを先天性奇型と演者の如く断ずるよりもその奇型から発した腫瘍と考える方がよいのではないか。

(3) 横隔膜ヘルニアの2例

外科Ⅱ 城谷均・岩橋寛治

73才の男で胃癌を合併した傍食道裂孔ヘルニアの1

例及び64才の女で Morgagni 氏孔ヘルニアの1例を経験したので報告し若干の考察を加えた。

質問 木村忠司

Morgagni 氏 hernia と Larrey 氏 Hernia の発生率を問う。

答

本邦報告例では Morgagni 氏孔ヘルニアは4例、Larrey 氏孔ヘルニアは1例です。

(4) 盲腸軸転症の1例

市立宇和島病院外科

池内彰・横山敏・福田治彦

症例 55才の男子。

下腹部の痙痛を主訴として入院、イレウス症状を呈する為直ちに開腹せる所、回盲共同間膜症を有し、盲腸、上行結腸起始部、回腸末端が時計の針方向に180度回転し、腸壁の一部壊死穿孔を認めた。一次的に回盲部切除を行い回腸横行結腸側々吻合を行い全治せしめた。

(5) 直腸腫瘍に対する肛門括約筋保存的手術の経験

外科Ⅰ 林一彦・半田謙二

質問 木村忠司

周囲からの癒瘍により新肛門管の狭窄を起す事はないか？

答

第Ⅱ例(Rectumkrebs 61才♂)に対しては Swenson 氏法を用いましたので比較的 Analring に近く Anastomose を行いました。(Ca 3cm)。この部に対する術後 Striktur は周囲の Narbe によつて圧迫されたものではなく、吻合部そのものの Striktur によるもので比較的簡単に之を切除し得ました。

(6) 難治性下腿潰瘍に対するカリクレインによる治療経験

外科Ⅰ 菊池晴彦

約13年前より下腿潰瘍を反復していた患者に対し、カリクレイン投与により、好結果を得たので報告す

る。

従来、このような例に用いられてきた交感神経切除術は、血管拡張効果は精々1ヵ月位しか持続せず、本症例の如き、治癒に1ヵ月以上要するような難治の潰瘍に対してはむしろ、カリクレインの如き、血管拡張剤を長期に亘り投与する方が、むしろ賢明でないかと考える。

追加 木村忠司

職業に復帰してからもカリクレンで再発を防止出来るかどうかを追求して欲しい。又 Vitamin E も亦有効と思う。

(7) 外科領域におけるブドウ球菌の感性成績について

市立宇和島病院外科

池内 彰・横山 敏・福田治彦

外科第1講座 西島 裕

細菌の化学療法剤、抗生物質剤に対する耐性獲得は最近著しい増加を示している。我々は最近4ヵ月間、外科領域から分離されたブドウ球菌22株について各種抗生物質、化学療法剤に対する感受性を測定した。1) 耐性菌が相対的に多い。2) ペニシリン、サルファ剤に約半数が耐性を得ている。3) 現在ではクロラムフェニコール、ストレプトマイシン、エリスロマイシンが有効である。4) 高度重耐性菌がかなり多い。5) 有効薬剤の選定は個々の分離菌の感性試験により決定すべきである。

(8) 制癌剤マーフィリンの使用経験

市立宇和島病院外科

池内 彰・横山 敏・福田治彦

制癌剤マーフィリンを胃癌6例、結腸癌2例、胆道癌、乳癌、多発性骨髄腫、ウイルム氏腫瘍各1例、計15例の悪性腫瘍患者に使用し、その臨床効果を観察した。

1. 何らかの形で症状が好転し、使用が有意義であったと思われるもの15例中8例である。

2. 腹水胸水等癌性滲出液の貯溜せる4例には全例に効果を認めた。

3. 全例に白血球数減少を認めず、6例にはむしろ増加を見た。

4. 副作用としての色素沈着は500mg以上使用せる7例中4例に認められた。

5. 副作用の為に治療を中止せるものは1例に過ぎなかつた。

追加 木村忠司

制癌剤で癒癒化した場合、当然通過障害が起り得る、その様な場合、外科的に機械的障害を除き乍ら制癌剤を使用すれば再発即ち絶望と云う考え方を近い将来に改善し得ると思う。

(9) オスグット・シュラッテル氏病と誤つた脛骨上端急性骨髄炎の1例(抄録)

厚生年金玉造整形外科病院

加藤 宏・田村哲男

13才の男子で誘因なくして左脛骨結節部に疼痛を来し、圧痛、局所熱感、軽い腫脹が認められる他、膝関節運動正常で、皮膚発赤、波動は全く見られず、レ線所見上でもオスグット・シュラッテル氏病の診断を下し、bone pegging を行う予定で、手術した所、黄緑色膿の排出をみ、脛骨上端の急性骨髄炎と判明した1例を報告した。病巣部は、小指頭大の空洞で、肉芽を充満し、壁は蚕食状凹凸不整で、硬化せず、新しい病巣であり、腐骨は認めない。腸骨より採取した bone chips を密につめ、創は一次縫合、術後は化学療法を強力に行い、経過良好で、術後8週間以後関節機能正常となり、術後1年後の状態で全く異常を認めなかつた。レ線学的にも経過良好で、移植骨は生着、病巣部骨硬化がみられた。

(10) 先天性習慣性膝関節脱臼の治験例

厚生年金玉造整形外科病院

山本忠治・宮武正弘

先天性習慣性膝関節脱臼の2例に対し関節囊内方の縮小縫合と同時に、此の関節囊及び筋成形術を加え、更に膝蓋靭帯の脛骨結節附着部の内方移動術を行った。又関節囊欠損部は遊離半筋膜移植により略々良好な成績をみたが、早期手術のものは比較的機能障害はなく、15才以上のものは膝蓋骨が大腿骨髁間滑動路面に不適合な変形をみる為、機能障害を貽し易いと思われる。本症例の手術は多種多様になるが要は脱臼の成因、即ち(I)膝蓋骨の發育不全形態異常、(II)大腿骨外裸發育不全、(III)大腿骨の内方回転、(IV)脛骨結節の外方転位、(V)膝蓋骨滑動路の發育不全、(VI)外反膝、(VII)大腿四頭筋の側方偏在、(VIII)外股筋と内股筋の不均衡(IX)、靭帯及び関節囊の弛緩等に対する精査を極め、此等に対処した最も侵襲のない方法を行い早期機能訓練が良いと考えた。